

アナール派社会史のインパクション

大江 一道

(1)

かの『共産党宣言』冒頭の有名な言いまわしにならえば、「いま歴史学には、一つの妖怪が歩きまわっている、——アナール派の妖怪が。」というふうにならうか。「アナール派」のところは、原文はむしろ「共産主義」である。

マルクスとエンゲルスは、「古いヨーロッパのすべての強国は、この妖怪を退治しようとして神聖な同盟を結んでいる」とつづけているわけだが、あえてパロディ風にいえば、日本の歴史学界においては、この「アナール派」という妖怪を退治しようとして、実証主義派とマルクス主義派が「神聖な同盟を結んでいる」という風景が、ここ数年にわたって展開している、といえるだろう。

ついでに、『宣言』の次の文句を借用しよう。「この事実から二つのことが考えられる。共産主義はすでに、すべてのヨーロッパの強国から一つの力と認められているということ。〔後略〕」

右の文の「共産主義」に「アナール派」を、「すべてのヨーロッパ強国」に「歴史学界」を置きかえてみれば、近年のわが国の歴史学界の動向がビタリおさまるといって仕掛けである。

こんなことを書くときすぐ目くじらをたてるむきもあるので、以上は当世流行のパロディのつもり、と念のため断っておきたいのだが、さてそもそも、この「アナール派」とは何ものか。

(2)

「アナール派」とは、現代フランス歴史

学界に大きな地歩を占める一派で、雑誌『アナール(年報)』に拠る人々をさす。この派の祖はマルク・ブロック Marc Bloch とリュシアン・フェーヴル Lucien Febvre という、中世史と近世史の泰斗である。二人は、一九二九年(昭和四)共同で『社会経済史年報』*Annales d'histoire économique et sociale* を創刊した。この歴史研究雑誌は、その後なんどか名を変えながらも現在にいたり、俊英な歴史家を擁して歴史学の新地平をきりひらきつつある。

ブロック、フェーヴルが願ったのは「生きた歴史学」の創造であった。「生きた歴史学」とは何か。この学派の主張の最良の理解者であるフランス近世史家、二宮宏之の適確な要約を借りれば、「それは、何よりもまず、現実に対する生き生きとした感覚に支えられている歴史学ということ」で、さらにいえば、「一つには、すべての事象を常に全体的な連関のうちに捉えること、第二には、過去を常に現在との対話のうちに捉えること」という二つの基本的な視点に支えられるものだ、ということになる。

現在によって過去を裁断するのでもな

く、また、過去を現在から切断するのではない。現在を生きる人間として、くり返し過去に問いかけ、くり返し過去を読み直すこと——その営みにおいて生じる緊張関係、それが過去と現在の対話なのであり、そのような自覚された問いかけこそが「生きた歴史学」をうむとするのがかれらの立場である——。この二宮の要約は、アナール派の基本姿勢を共感をもってよく捉えたものといえる。

現在のアナール派のリーダー的存在は、ジャック・ル・ゴフとル・ロワ・ラデュリである。一九二九年『アナール(年報)』創刊の年に生まれたル・ロワ・ラデュリは、第二次世界大戦後の青年期に、いちじフランス共産党員であった。が、党のレーニン・スターリン主義の教条化に失望して離党したという経歴の持主でもある。そのル・ロワ・ラデュリは、みずからの歴史学を、「民俗・歴史学」ethnographie historiqueあるいは「歴史学的人類学」anthropologie historique「人類学的歴史学」histoire anthropologiqueへの試行と名づける。

それがいかなる内実をもつ試行であるかは、樺山紘一らの訳出になる、「新しい歴

史〔歴史人類学への道〕」(新評論)と題されたかれの論文集が、おおよそそのことを示してくれよう。その冒頭の論文——コレージュ・ド・フランス教授就任講義(一九七三年十一月三十日)——の題名は、アナール派の志向を象徴してあまりある。いわく、「動かざる歴史」l'histoire immobile。

歴史の本質は変化にあり、として、これまでの歴史は、その表層に浮沈しつつまぐるしく変動する現象に眼を向けてきた。

だが、人間活動の諸側面に現われる変動の波長はけっして単一ではなく、短期・中期・長期のズレがある。歴史は、たがいにズレあうそれらのさまざまな波長をもつ変動——たとえば「物価や生産量といった経済活動、人口変動、さらには印刷物の出版点数や死を前にした人々の態度の変化等々」(二宮)——の複合体であり、それらを全体として一体性のもとに捉えたときにはじめて解明されるものとするならば、表層に現われる短期変動の現象ではなく、深部にあって緩慢な変化しか示さないような事象にこそ歴史家は注目すべきではないのか。

こうして、アナール派の眼は、いっせいに「動かざる歴史」に向うのである。「事

件史よ、さらば」である。

アナール派のまなざしは、歴史の深部、深層に向う。その深層で発見するのは、こころとからだの複合体である人間の身体である。その身体が、「動かざる歴史」にせまる一切の出発点となる。そして、からだの問題として、食物や衣服や居住条件、健康状態や疾病がとりあげられることになり、こころの問題として、感覚や情念に見られる特徴、空間や時間に対する観念、生死の観念や彼岸のイメージ等の分析を通じて、人々の「心性」mentalitéが探られる。このアナール派的歴史学が、目下、歴史心理学の方向にも、また歴史人類学の方向にもひらかれつつあるという状況を、以上の説明によってわれわれは了解できるのではなかるうか。まことに、リュシアン・フエーヴルの「歴史学は人間諸科学の四ツ辻であるべきだ」という考えは、かれの後輩たちの目ざましい活動を通じていま着実にのりつつある。

(3)

はじめに述べたように、アナール派は、一九七〇年代に入ってから、わが国の歴史

学界では「社会史」という歴史方法論の名称のもとに、確実な衝撃力となって学界をゆさぶっている。そして、その結果として、それ以前の流動現象とは質的に異った波長を歴史学の領域に生じさせている。

このような動向を探る一つの便法がある。それは、『史学雑誌』（史学会編）が毎年五月号に掲載する、前年度の歴史学界の「回顧と展望」を追ってみることである。

「この回顧と展望」には、必ず冒頭に「総説」と「歴史理論」のフレイムが置かれる。この二つの欄の執筆者は、年度によって変るものの、歴史の動向に広く目くばりのきく研究者が起用されるのが通例である。

そこで、一九七七年度以降一九八一年度までの五年間の「回顧と展望」号の「総説」と「歴史理論」の欄を手がかりとして、アナール派II社会史派なる「妖怪」の「徘徊」がいかなる波紋、つまり波長を生じさせているかを、かんたんに見てみることにしよう。

一九七七年度の「回顧と展望」では、「総説」（土田直鎮・東大史料編纂所）はわれわれが論じてきた問題には鈍感であるが、

「歴史理論」（中井信彦・慶応大）のほうでは、邦訳されたリュシアン・フェーヴルの『歴史のための闘い』（長谷川輝夫訳・創文社）をあげ、「プロブレマティックな歴史を」と呼びかけたフェーヴルの初心に立ちもどって学ぶところは多いはず、とアナール派への関心を促がした。

一九七八年度のものは、「総説」（吉前達・東大）「歴史理論」（榊山紘一・東大）とも、問題の「衝撃力」について限られた枚数の殆んどを費しているのが特徴的であった。じつは、一九七六年末に、文化人類学の山口昌男が同年来日したアナール派のジャック・ル・ゴフの歴史人類学的方法論を高く評価し、社会経済史を中心に構築され蓄積されてきた戦後日本の研究のパラダイムはもう破産したのだ、と痛烈に歴史学者の現在を批判していた『思想』六三〇号）。これに対するフランス近代史家、遅塚忠躬（都立大）の反論『歴史学研究』四五五号）が両欄でとりあげられたが、人類学との緊張関係を歴史学者がはつきりと自覚しだしたのは、この年あたりからではないだろうか。

以前からフランス歴史学の動向に敏感に

反応していた木村尚三郎は、この年も「動かざる歴史」「心性」へのあちらの学者の注目ぶりを紹介する（『和魂和才のすすめ』日本経済新聞社）。社会経済史学会も、この年の大会では共通論題に深層歴史学をとりあげ、構成方法の新しい展開を模索した。

また、マルクス主義派の内部にも自己検討の動きが現れた。黒田俊雄（大阪大）は、一九六〇年代におこった新しい学問の潮流に対して二つの歴史学（実証史学とマルクス史学）が「拒絶反応」の砦となり、歴史理論における不生産構造を代表する標準的な二つの立場となった、とその保守性を痛烈に批判した（『歴史評論』三三四号）。他方では同じ陣営内で津田秀夫（関西大）が、「深層への歴史学」批判」で、発展概念が生まれないこの方法論では、歴史の創造にかかわる認識主体の実践的課題は生まれてこない、と反論する（『歴史評論』三四一号）。

ともあれ、この年度の動向を総括して弓削は、「われわれはいま、歴史学とは、窮極的には何を課題とする学問なのかを問い直さなければならないのではなからうか」

と述べ、樺山は「まことに、世はいま、史学史の時代なのであろうか。それが歴史学と学問全体の大転換を予兆しているのであれば、いかにも喜ばしいことであるが。」と書いた。

つづいて一九七九年。ここでは「総説」を前年につづき弓削達が担当するが、「歴史理論」はこの小稿にしばしば紹介する二宮宏之（東京外語大）が受けもつ。アナール派II社会史派の影響はいよいよ広まり深まっていた。

この年は、『思想』（六六三号）が「社会史」の特集をくみ、秋の史学会大会が「歴史学と現代」を主題とするシンポジウムをもうけ、『歴史評論』（三五四号）も「ヨーロッパ史学の新動向」との特集でフランス・西ドイツの社会史の展開を紹介する。また著作では、井上幸治『歴史を語る』（二玄社）、角山栄・速水融編『経済史学の発達』（同文館。講座『西洋経済史』第五巻）が、歴史学の現状の反省と社会史・生活史へのアプローチを論じ、増田四郎が「社会史への道」を『本と批評』に連載しはじめる（のちに同名の著作として日本エディタースタイル出版部より刊行）。

社会史は、「概念のオバケのような歴史学」（二宮のことば）になり果てた戦後歴史学が追いこまれている袋小路に見切りをつけて現われたもの、と弓削はみる。柴田三千雄（東大）はさきの『思想』の「特集」での鼎談で、「社会史が担っているいろいろな問題、社会史が提起しているさまざまな視角を、歴史学が積極的にとりこんでいかないと、歴史学そのものが、現代における知のひとつの形態として、生き生きとした役割を果せなくなるのではないか」とかた。

同じ鼎談のメンバーでもある二宮は、『歴史理論』の欄で、歴史は何よりも「生きられた歴史」として捉えられるべきこと、そのさい浮び上がってくるのは、民衆生活の反覆される日常性のレヴェルの問題であること、その歴史の読み直しにとっての鍵概念は「集合心性」であること、などについて適切に述べている。また二宮は、前記の『歴史評論』に「社会史における『集合心性』」なる論文をよせ、G・ルフェーヴルのフランス革命論を手がかりに、これまでとかく歴史学ではなおざりにされてきた「心性」の問題にせまっている。

(4)

こうした状況をせおって歴史学界は一九八〇年代に入ったのであるが、考えてみれば、これまでみてきたような歴史学界の反省は、江口朴郎もいうとおり、またしても「西ヨーロッパ側からの歴史的叙述にしがって」『世界史における現在』（大月書店）おこなわれているわけである。同じことを増田四郎も指摘する。「新しい歴史把握への要請は、残念なことに、非ヨーロッパ世界から提唱されたものではなく、むしろ西ヨーロッパの思想界の内部からおこった」と（前出『社会史への道』）。

ヨーロッパ中心史観の克服が、ヨーロッパ自身の自己超克の思想的営為に学んだら、依拠したりせざるをえないというわが国の現実とは、なにも歴史学だけのことではない。残念ながら、学問・文化全般においてではないのか。そこでは、ついつい「最新学説」の導入・流行そしてある時期での棚上げ、という循環となり、「たえず零からのやり直しをやっているというような印象」（世良晃志郎のことば）をうむことになる。

一九八〇年度の「回顧と展望」の「歴史理論」を担当した西川正雄（東大）は、「社会史」の流行もそれと同じことではないのか、ときつい反撃に出た。いわく、「自らのこれまでの発想や研究分野を大切にせず、木に竹をついだ如くマンタリテとかパラダイムとか言ってみても、何ら『新しい歴史把握』に連らない」と。西川は「妖怪」におびえ、その後ろにかくれたがるものをおう批判した。

同時に西川は、「社会史」の「流行」には、政治的無関心、現実からの逃避と表裏一体をなしている面があり、だからこそ、「社会史」の諸命題は、その批判精神を「あく抜き」され、教科書の「指導要領」や商業主義にそっくりとりこまれてしまつて、「国民国家」至上主義の側からの強まりゆく攻撃に屈し終る危険がいっぱい、と憂慮と不満をぶちまける。

『戦後史学』が何を達成し、どこに不備があるのか、その『在庫目録』を綿密に検討することなく、浮足立って他人事のように『行詰った』と言って何が生まれるのであろうか。『行き詰った』のは自分ではないのか」という文には、西川の怒りの肉声

があらわに出てくる。共鳴者も多からうし、あたっている事実もあるう。だが、そういう批判の調子が、じつはわれわれの間でなんどかくり返される、あまり生産的でないイデオロギッシュな論調の匂いを漂わせているのが、わたしには気になる。

「社会史」の「流行」とはこのことか、といったていの無関心も一方にはあるわけだ、「回顧と展望」でも、「総説」を担当した一九八〇年度の護雅夫（日大）、一九八一年度の田中正俊（東大）はともに東洋史であるが、およそここ数年間の歴史学界に対するアナル派の、また社会史の衝撃などにはまったく無知、無関心であるようなまとめ方をしている。だから、一九八一年度の「歴史理論」のほうで、担当の成瀬治（東大）が前年の西川の批判を了解しつつも、それが欧米産の方法論であれ現代の歴史意識に結びつく限り、近・現代史の研究にとつても前近代史の研究にとつても、プラスに作用する可能性がそこにひそんでいることを認めて、歴史の読み直しに活用すべきだろうという意味の論をたてているのは、妥当な見方だと映じられてくる。

じじつ、一九八一年には、網野善彦・石

井進・阿部謹也・樺山紘一の中世史家による共同討議『中世の風景』（上）（中央公論社）が、生活の日常性の次元でさまざまな問題を拾いあげ、全体性への目くばりがよく届いた斬新なアプローチによって、社会史的方法の豊かな可能性を示してくれた。さらに阿部謹也は『中世の窓から』（朝日新聞社）で人類学のM・モースの「贈与論」を吸収しつつ、中世西欧社会の人間関係の展開を新鮮な眼でとらえかえた。日本史学でも、民俗学との新たな積極的連携をめざす網野善彦の近年の諸研究が、批判を誘起しつつあきらかに衝撃力をましながら歴史学の活性化に貢献していることは、だれしも認めないわけにはいかない。

一九八二年に入つて、都市論の盛行と相渉りつつ、歴史学の側からも角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国』や喜安朗の『パリの聖月曜日』（ともに平凡社）のような、民衆の生活や社会運動を社会史的方法を駆使して興味深く描いた歴史叙述が現われて注目をひいた。また、網野善彦と阿部謹也の対談『中世の再発見』（平凡社）が、歴史・人間・文化への新しい回路の所在を、「歎ばしき学問」の味わいをもつて教えて

くれた。

(5)

以上にみてきたように、いま、わが国の歴史学の前線は、固定化されたせまい歴史学の領分をみずから越境して、より広々とした地平に進みつつある。歴史を学ぶことのおもしろさ、たのしさが、したがってまた、歴史という学問が本来もたねばならぬ活力が、ようやく蘇ろうとしている。

この評価はいささか樂觀的にすぎるかもしれない。が、危機の時代はつねに問題を悲觀的にとらえなければならぬ、と固定的に考える必要もなからう。ブロックやフエーヴルらが、世界恐慌につづき第二次世界大戦の危機が濃くなったあの一九三〇年代に、「全体史」*l'histoire totale*と「生きた歴史学」*l'histoire vivante*の創造を、現代からははるけくも遠い中世史と近世史において試み、多くの実りをもたらしたという事実を想起するならば。

〔付記〕

アナール派が何をどう議論しているか

は、これまでごく一部の研究者にしかわからなかった。が、ようやく一九八〇年になって前述のように、『アナール』誌編集スタッフのル・ロワ・ラデュリの論文集『歴史家の領域』の抄訳が、『新しい歴史〔歴史人類学への道〕（新評論）』と題して刊行された。

収録された九本の論文は、いずれも『アナール』誌に掲載されたものではないが、アナール派に対するさまざまな批判を念頭において作られた論文群であるため、アナール派を理解するのに好都合な書物となっている。

その立場は、第一論文の「動かざる歴史」に、その挑発的なタイトル選びも含めて明確に示されているが、気候・人口・細菌・死など、これまでの「事件史」的歴史を嫌うアナール派の眼の向きようが、よくうかがえる。

これとほぼ同時に、十五・十八世紀の民衆意識を独自の角度から探ったY・M・ベルセの『祭りと叛乱』（井上幸治監訳）も同社から出版されたが、一九八二年から同じ新評論において『アナール』誌の論文を「テーマ」とまとめる叢書が『歴史を拓く』

の名称で刊行されだした。そのトップとして登場したのは『魔女とシャリヴァリ』（長谷川輝夫ほか訳）である。

この叢書は、以下「家族の歴史社会学」（仮題、『医と病い』など八つのテーマに分類されて『アナール』誌に掲載された注目すべき論文のアンソロジーとなるようである。なお、近代の犯罪と刑罰の構造の起源を「旧制度」の社会について解明したP・ディヨンの『監獄の時代』（福井憲彦訳・新評論）が、『魔女とシャリヴァリ』とほぼ同時に公刊された。

魔女はよく知られているが、シャリヴァリとは、喧騒をきわめた「乱痴気騒ぎ」のことで、本書に収録された「ラファミュージック」なる論文の筆者、イギリスのE・P・トムソンの定義によれば、「共同体のある種の規範に違反した人びとに対し、儀式化した形態で行われる敵対行為」である。中世末、近世初頭の民衆の集合心性に迫る方法を、この論文群によつて私たちは教えられるにちがいない。

（専任・西洋文化史）